

時代を隔てた二人の学術探険家——森丑之助と楊南郡先生

宮岡真央子

はじめに

日本統治期の台湾原住民族研究について、未刊行資料の発掘や整理、研究成果や人物に対する再評価の動きが盛んになったのは、1980年代末頃からのことである。それは台湾と日本で互いに呼応しつつおこなわれ、原住民族研究の礎石と軌跡の再確認・理解を促した。そのなかで、この一連の動きを牽引し、大きな功績を残してきたのが楊南郡先生であることはいうまでもない。今日の台湾において、楊先生の数々の翻訳や著作とそれにとまなう詳細な調査・研究の成果が、日本統治期の学者と彼らの調査研究に対する理解の基本的枠組みを提供しているということに異論はないだろう。

報告者は以前、日本統治期初期の原住民族研究者の一人である森丑之助（1877-1926）について、書誌学的な研究を行った経験がある [宮岡 1997a,b]。同じ頃、台湾では楊南郡先生がすでに森丑之助の研究に着手されており、その後まもなく翻訳選集を出版された [森 2000]。森丑之助の調査回顧録 [丙牛生 1924a] のタイトルである「生蕃行脚」を書名に冠したこの書籍には、非常に詳細な森の年譜や著作目録、調査行程を示す地図が付されたほか、「学術探険家森丑之助」と題された評伝が添えられている [楊南郡 2000]。この評伝は、森丑之助に関して過去から現在まで著されたもののうちで、質・量ともに突出しており、森の研究と人物像の概要はこれによって初めて明らかにされたといえる。刊行からすでに10年を経た今日、森丑之助に関する理解は、楊先生のこの研究を抜きにしては考えられない。その意味でこの評伝は、楊先生がこれまで数々手がけてきた日本統治期の学者についての研究成果のうちでも、記念碑的業績の一つとして挙げることができよう。

そこで本報告では、森丑之助の研究に従事した経験のある報告者の立場から、この評伝を森丑之助研究史のなかに位置づけ、その独自性を数点に整理して述べることにする。そして、楊南郡先生が森丑之助の研究と生き方に見出した「学術探険家」という形容が、実は楊先生ご自身に対しても用いることがふさわしいものであることを論じたい。またそれ

をふまえて、100年の時を隔てた二人の学術探険家の違いについても言及しようと思う¹。

1. 忘れられた研究者・森丑之助

従来研究者の間で、森丑之助は主に3つの側面から認知されてきた。ひとつは鳥居龍蔵の調査報告に登場する調査助手という側面である。また、考古学分野では多くの遺跡の発見者として評価されてきた〔金関／国分 1979:6〕。そして台湾原住民族研究では、早期の写真集『台湾蕃族図譜（第1・2巻）』やタイヤル民族誌『台湾蕃族志（第1巻）』の著者としても知られてきた〔森丑之助 1915,1917〕。

しかしながら、研究者にその名前自体は知られていたとしても、かつて森丑之助という人物や彼の研究そのものが語られることは決して多くなかった。これはおそらく、森が無学歴のまま総督府囑託などの身分で調査研究に従事し、後継者や弟子と呼べる人をもたなかったことに起因するものと思われる。森の死からわずか2年後の昭和3（1928）年に開学した台北帝国大学に設置され、昭和期の原住民族研究の本拠地となった土俗・人種学研究室に所属した宮本延人や馬淵東一にとっても、森についての知識はその著作に関するものを除いては伝聞の枠を出なかった〔馬淵 1954b:91、宮本／瀬川／馬淵 1987:172〕²。森丑之助に関する情報は、非常に断片的な形でしか後世に残されなかったのである。

もっとも実際のところ、森丑之助は明治末から大正中頃にかけて、原住民族に関する知識の権威的な存在であった。例えば、大正元（1912）年に刊行された『日本大百科事典』（三省堂）の「台湾蕃族」という項目は、森によって執筆されたものであった〔森丑之助 1912〕。また、台湾総督府が大正2（1913）年より終戦まで公式に用いた民族分類法（アミ、タイヤル、サイシャット、ブヌン、ツォウ、パイワン、ヤミの七分類）は、森丑之助によるものを基礎としていた〔馬淵 1954a:3-4、宮岡 1997b:126〕。そして、森の撮影した写真の数々はこれまで所々で繰り返し使用されてきたし、森が台湾総督府博物館で収集した膨大な標本資料は国立台湾博物館へと引き継がれた³。にもかかわらず、森丑之助本人については依

¹ 本小稿は、楊南郡先生の「学術探険家森丑之助」の日本語訳〔楊 2005〕に寄せた解説文〔宮岡 2005〕をもととし、それに加筆・修正を加えたものである。

² 一方、同研究室の主任教授を務めた移川子之蔵は森と面識があった〔台湾総督府博物館 1939:389-390〕。森の交友関係については〔笠原 2005a〕に詳しい。

³ 国立台湾博物館で2008年に開催された特別展「百年物語—台湾博物館世紀展蔵特展」では、同館に大きな貢献をした人物の一人として森丑之助がとりあげられ、森によって収集された標本資料の紹介がなされた〔李 2009:48-53〕。

然よく知られぬままであった。楊先生の嘆くように、森丑之助は、忘れられた研究者であったのだ [楊 2000:30,110]。

日本では、1980年代後半から台湾における日本統治期の資料発掘の動きと呼応しつつ、過去の台湾原住民族研究者の業績が整理・再評価されはじめた。鳥居龍蔵や伊能嘉矩に関する資料整理・再評価の動きに遅れること約10年、1990年代後半以降ようやく日本において森丑之助についての資料整理が着手された [宮岡 1997a, b、笠原 2002、森丑之助 2002 など]。これは、冒頭で述べたように楊南郡先生の森丑之助著作選集の出版と相前後する出来事である。2003年には和歌山県新宮市の佐藤春夫記念館において、台湾を舞台にした作品を多く遺した作家佐藤春夫と森丑之助の交友関係に焦点を当て、森から佐藤に宛てた書簡を公表する企画展が開催された [新宮市立佐藤春夫記念館編 2003]。これら一連の動きによって、にわかに森丑之助という研究者の具体像が浮かび上がってきたといつてよいだろう。とはいえ、これらは書誌学的な研究を主とした。森丑之助という人物に対するより全体的な理解は、楊先生による研究以降になされるようになったのである⁴。

2. 楊南郡先生による森丑之助研究の独自性

楊南郡先生が森丑之助の研究と生涯の全体像に迫りえた背景として、これまで知られてこなかった森の著作、そして他者による森に関する記述の新たな「発見」があったことをまず指摘できる。これを、楊先生による森研究の独自性の第1点目として挙げておきたい。

従来知られてきた森丑之助の著作とは、前述の『台湾蕃族志』や『台湾蕃族図譜』などの単行本のほかは、『人類学雑誌』およびその前身の『東京人類学会雑誌』、『台湾時報』や『東洋時報』などに掲載された論文や彙報類であり、それらは簡潔な文体の調査報告が中心を占める [宮岡 1997a:192-193]。それらのなかに森丑之助の個人的な生活や思想に触れた部分を見いだすことは難しい。また、当時の関係者が森について記したものも限られていて、その人物像を想像することは容易ではなかった。そのなかで、森が大正2年に台湾を離れるときに行った講演録「台湾蕃族に就て」 [森丑之助 1913] は、森の原住民族に対する考え方や、自らの生い立ちが詳しく語られているという点で異色であり、楊先生もこ

⁴ 2005年に日本で楊先生の「学術探険家森丑之助」が翻訳出版された際には、笠原政治により佐藤春夫をはじめとする森の交友録が論じられた [笠原 2005a, b]。また同年には、台湾原住民族に関するルポルタージュを多く手がけてきた柳本通彦が、森丑之助を伊能嘉

こから多くを引用しながら、森の思想や半生を述べている。しかし、楊先生はそれにとどまらず、それ以外に森丑之助の人となりを伝える文章を、当時の新聞や雑誌を丹念に調査することで新たに「発見」し、それらをていねいに読み解くことで、森丑之助の思想やふるまいについて豊富で具体的なイメージをつかむことに成功したのであった。

たとえば、楊南郡先生によって発掘された著作の一つ、『台湾日日新報』紙上に 19 回にわたって連載された「南中央山脈探険」は、森の数ある調査報告文のなかでもきわめて動的で描写的な読み物である〔森丙午 1909〕。記事は毎回の新聞一面を飾り、あたかも人気連載小説のような体をなしている。おそらく当時の台湾で、森が山地で経験することは、台湾の平地の日々とは全くかけ離れた世界のものに属し、一般読者の多大なる興味や関心を引くものであったことが容易に想像できる。そしてそこには、森と原住民族との関わり合いが濃密に描かれている。森丑之助がタルナス社でブヌンのアリマン・シケンに首を狙われたのを逃げ延びて、数年後には彼と深い友情を築いたという森自身による述懐は、森の人となり、そして原住民族との交友を理解するために大変重要な資料である。

また、やはりこれまで顧みられることのなかった『実業之台湾』所載の晩年の森の論考の数々を取り上げたことも看過できない〔丙午生 1924b、森丙午 1924、1925a、1925b〕。これらは、森丑之助が官界や学界、そして一般台湾社会に向けて原住民族社会や研究に対する自らの立場・意見を表明した文章である。ここに述べられた森丑之助の思想を通して、その人物像は非常に具体的なものとなった。

さらに楊先生は、森自身の著作のみならず、森の死後に書かれた宮川次郎による文章や、森と親しかった尾崎秀眞の談話を載せた『台湾日日新報』上の森の訃報記事などをも参照することで、森の晩年の思想や活動についての新たな事実を提示することに成功した〔宮川 1926、筆者不詳 1926〕。宮川や尾崎は、ブヌンの抗日戦に心を痛めた森が大阪毎日新聞からの著作出版の助成金を使ってブヌンの移住と生活の安定を図ろうとしたという「蕃人樂園計画」について言及しているが、これは森が目指していた『台湾蕃族志』や『台湾蕃族図譜』の続刊をしないままに忽然と姿を消したことの原因の一端を伝えて余りある。森丑之助という人物の生きざまを理解する上で、たいへん重要な証言といえよう。楊先生の丹念な調査と研究によって、森という人物の具体像はようやくあらわになったのである。

楊先生による森丑之助研究の独自性の第 2 点目は、森の中央山脈を舞台にした調査研究についての理解が、すべて楊先生のベテラン登山家としての豊かな経験と確かな視点に裏

矩・田代安定と並ぶ「明治の冒険科学者」として論じる書籍を刊行した〔柳本 2005〕。

打ちされたものであるという点である。そもそも、森自身の文章のなかでその行程を詳細に記したものはきわめて少ない。あるとしても地名が断片的に記されている程度であり、しかもそれは、現在ではもはや使用されない日本語による地名、現在では移住・廃絶した村名などである。それらの現在地を知ることは今日となつては甚だ困難だが、楊先生は、それらの地名と森が断片的に記した地形や周囲の環境の描写とを照らし合わせることによって現在地を探り、それらを地図上にプロットするという大変根気を要する作業を行うことで、森丑之助の歩いた道のりや調査歴を再現することに成功した。台湾の山々を隈なく自らの脚で歩いた経験と、その地形や環境に対する理解がなければ、決してなしえなかった成果である。同時代の人びとにも理解困難であつたらう森の調査研究の足跡が、100年の時を越え、楊南郡先生によって見事に再構成されたのだった。

楊南郡先生の森丑之助研究の独自性の第3点目として、これまで原住民族や考古学の研究分野でのみ語られてきた森丑之助の業績について、新たに植物学や地理学への貢献を付け加えたという点が挙げられる。たとえば植物学では、森の新種発見の痕跡として学名や中国語名に森の名が含まれる高山植物が少なくとも20種以上あることが指摘された。楊先生は、植物学者佐々木舜一による評価や森自身の川上瀧也との交流を綴った文章などをも参照しつつ、これまで注意が払われてこなかった森の植物学研究における業績を提示したのであつた〔楊南郡 2000:57-62〕。また地理学については、先にも触れた新聞記事「南中央山脈探検」に記された、玉山山脈が中央山脈から独立した一つの山脈であることを証明するための調査を例に取りながら、台湾の地理学において森の果たした役割を強調した〔楊南郡 2000:53-57〕。

さらにもう一点、「学術探険家森丑之助」で用いられた表現手法という観点から楊南郡先生の研究の独自性を述べるとすれば、それは、文学としての高い品性を備えているという点であろう。よく知られるように、これまで楊先生の著作の多くは、「ルポルタージュ文学」としても評価されてきた。なかでもこの「学術探険家森丑之助」における描写は動的で劇的であり、あたかも森を主人公に据えた小説のような風格さえ備えている。地道な実証主義に裏付けられながらも、リアリティを引き出すために文学的な修辞を用いるという手法こそ、楊先生の独自のスタイルであるといえよう。

3. 時代を隔てた二人の学術探険家——森丑之助と楊南郡先生

楊先生がこれまでのご研究で扱ってこられたのは、多くが研究という世界に身をおいた人びとである。しかし、それらの人びとの足跡を追う際に重視されるのは、当の彼らが世に出した学術的研究成果そのものというよりは、その素地となった調査の行程やさらにそれら調査の原動力としての志、熱意、人となりなどである。それゆえに、詳細な資料にもとづいてアカデミズムに関わる人びとについて語るものでありながら、その語り口にアカデミズムの用語や理論がふりかざされることはなく、第一に、対象を「人」としての魅力に満ちたリアルな存在として描くことになる。「学術探険家森丑之助」のなかの一文を挙げておこう。楊先生は森丑之助が学問を積まずに調査を急いだことをさして、次のように記した。

学問の基礎がなかったために、彼が、实地踏査における多大な労苦を経た後に手に入れた一次的資料とオリジナルな論点は、みな学術用語は用いられない素朴で飾り気のない記録として提出された。それは目の前で見聞きした現況に対する最も質朴な記述であり、主観的理論によって事実が解釈されることはなかった。このような未加工な本来の記録は、理論化された学術論文に比して更に価値がある。なぜなら、学術論文は新たな証拠が提出されれば、当時は至高の經典と見なされていたとしても、やがては笑い話にさえ取り上げられなくなるかもしれないという可能性を常にはらんでいる。しかし、实地探訪による村落生活、文化や地理に関する本来の姿の記録は、数年後に調査訪問の対象とした場合、それが時勢の変化によって消失あるいは変容している状態では、原初の記録として更にその価値を増すのである。[楊南郡 2000:39]

楊南郡先生がここで書いているのは森丑之助のことである。しかしそこには、楊先生ご自身の立場・姿勢といったものが色濃く反映されているように思えてならない。

たとえば、楊先生の手による翻訳書には、原書には存在しない調査行程を示す地図や膨大な訳注が常に添えられてきた。これらは、気の遠くなるような地道な実証研究の賜物である。形式としては翻訳書の付属資料の形をとるが、それらはまさに楊先生独自の研究成果といえる。そして、この楊先生の地道な実証主義に支えられて初めて、読者は 100 年前の学者たちについて深く理解することが可能になる。これは楊先生独自の手法であり、他人には真似できない所業である。

おそらく楊先生は、いかなる研究機関にも属さず自らの知的関心に沿って独自の翻訳・

研究スタイルを築き上げてきたご自身のあり方を、森の生き方と重ねあわせ、強い共感を抱いたのではないだろうか。身ひとつで知の世界に貪欲に入り込み、常にアカデミズムから距離を置いた独自の立場から発言・研究をしてきた楊先生のそのお姿は、森丑之助と大きく重なってみえる。楊南郡先生は、自らの足でフィールドを歩き、そこから思考する。そのやり方を貫徹する姿は、まさに森丑之助と同じく「学術探険家」と呼ぶにふさわしい。現代の学術探険家である楊南郡先生は、ご自身の研究と探険を通じて森丑之助という人物に邂逅した。楊南郡先生は、100年という時代を隔てた先達の人生と心情に寄り添い、共鳴し、その感動を我々の前に示したのである。

しかしながら、「学術探険家」という共通の形容をなしえたとしても、言うまでもなく2人には決定的に異なる側面がある。森丑之助は、さまざまな社会的期待や圧力と自らの問題意識や志との狭間で苦渋し、結果的には自らの理想を叶えることなく、それゆえに悲嘆にくれて40代の終わりにその人生を終えてしまった。楊南郡先生は、森が焦り、急ぎすぎたことを指摘している [楊南郡 2000:112]。これに対して楊先生は、他の人が追従しえない自らの道をひたすら切り拓き、それによって数々の前人未踏の業績を紡ぎだし、80才になられる今日に至るまでなお現役であり続けている。その意味で楊南郡先生は、100年前の森丑之助の挫折や失望に深い共感を示しつつ、そこから遠く隔たった新たな境地に立ってもおられるのだといえよう。

おわりに

以上、非常に簡単ではあるが、ここでは楊南郡先生の森丑之助研究について、その独自性と意義を論じてきた。楊先生が実践されている過去の研究者の声にまず謙虚に耳を傾けるといふご姿勢や、地道で徹底的な実証にこだわるという研究スタイルは、報告者にとってはこれまでも常に学ぶべき手本としてあり続けてきた。森丑之助や楊南郡先生のように中央山脈を縦横に探険することは難しいとしても、自らの知的関心や使命感に偽ることなく、独自の研究成果を世に問い独自の役割を果たす意欲を持ち続けるという、学術探険家としての生き方に学ぶ必要性と重要性とを、今ここにあらためて痛感している次第である。

参考文献

笠原政治 2002『文化人類学の先駆者・森丑之助の研究』（科学研究費研究成果報告書）

2005a 「師・友人・訪問者たち」 楊南郡著、笠原政治／宮岡真央子／宮崎聖子編
訳『幻の人類学者森丑之助—台湾原住民の研究に捧げた生涯』pp.231-248、
東京：風響社。

2005b 「森丑之助と佐藤春夫」 楊南郡著、笠原政治／宮岡真央子／宮崎聖子編訳
『幻の人類学者森丑之助—台湾原住民の研究に捧げた生涯』 pp.249-274、
東京：風響社。

金関丈夫／国分直一 1979 『台湾考古誌』 東京：法政大学出版会。

新宮市立佐藤春夫記念館編 2003 『佐藤春夫宛 森丑之助書簡』 新宮：新宮市立佐藤春夫
記念館。

台湾総督府博物館編 1939 『創立三十年記念論文集』 台北：台湾博物館協会。

丙牛生 1924a 「生蕃行脚(1-5)」 『台湾時報』 55:106-114, 56:141-149, 57:158-166,
59:107-113, 62:144-155。

1924b 「浪人氣質」 『実業の台湾』 16(10):62-65。

馬淵東一 1954a 「高砂族の分類—学史的回顧」 『民族学研究』 18(1-2):1-11 (1974 『馬淵東
一著作集 第2巻』 pp.249-273、東京：社会思想社)。

1954b 「高砂族に関する社会人類学」 『民族学研究』 18(1-2):86-104 (1974 『馬
淵東一著作集 第1巻』 pp.443-483、東京：社会思想社)。

宮岡真央子 1997a 「森丑之助の著作目録及び若干の解説」 『台湾原住民研究』 2:189-199、
東京：風響社。

1997b 「野人の文化人類学—森丑之助の生涯と研究」 『南方文化』 24: 123-137、
天理：天理南方文化研究会。

2005 「解説」 楊南郡著、笠原政治／宮岡真央子／宮崎聖子編訳『幻の人類学者
森丑之助—台湾原住民の研究に捧げた生涯』 pp.109-122、東京：風響社。

宮川次郎 1926 「蕃通森丙午の死因」 『台湾・南支・南洋パンフレット』 21、東京：拓殖
通信社。

宮本延人／瀬川孝吉／馬淵東一 1987 『台湾の民族と文化』 東京：六興出版。

森丑之助 1912 「台湾蕃族」 『日本百科大事典 第6巻』 pp.734-737、東京：三省堂。

1913 「台湾蕃族に就て(上・下)」 『台湾時報』 47:6-13, 49:15-27。

1915 『台湾蕃族図譜(第1巻・第2巻)』 台北：臨時台湾旧慣調査会。

1917 『台湾蕃族志(第1巻)』、台北：臨時台湾旧慣調査会。

- 2000 『生蕃行脚——森丑之助的台湾探険』 楊南郡訳、台北：遠流出版。
- 2002 「台湾蕃族の種別について」 江田明彦編『台湾原住民研究』 6: 330-343。
- 森丙牛 1909 「南中央山脈探険(1-19)」『台湾日日新報』 1月7日・2月4日。
- 1924 「台湾の生蕃問題」『実業の台湾』 16(12):13-16。
- 1925a 「台日社説の蕃人に関する社説を読みで一敢て世人の謬相を解く」『実業の台湾』 14(7):22-26,30。
- 1925b 「蕃地開発の先決問題として—蕃務法規制定の必要」『実業の台湾』 17(8): 6-15,61。
- 1925c 「川上農学士と台湾植物調査事業」『実業の台湾』 17(9): 23-27。
- 柳本通彦 2005 『明治の冒険科学者たち—新天地・台湾にかけた夢』 東京：新潮社。
- 楊南郡 2000 「学術探険家森丑之助」『生蕃行脚—森丑之助的台湾探険』 pp.29-113、台北：遠流出版。
- 楊南郡 2005 「学術探険家森丑之助」 楊南郡著、笠原政治／宮岡真央子／宮崎聖子編訳『幻の人類学者森丑之助—台湾原住民の研究に捧げた生涯』 pp.15-107、東京：風響社。
- 李子寧編 2009 『百年物語—台湾博物館世紀展蔵專輯』 台北：国立台湾博物館。
- 筆者不詳 1926 「蕃通の第一人者森丙牛氏の死」『台湾日日新報』 7月31日。

時代相隔的兩位學術探險家*

——森丑之助與楊南郡老師

宮岡真央子

日本福岡大學人文學部

壹、前言

挖掘、整理日治時期台灣原住民族研究之未出刊資料或重新評價當時的研究成果與人物等學術活動，乃自 1980 年代後期開始興盛。台灣與日本彼此呼應同時期進行，促使學界重新確認、理解原住民族研究之基礎與軌跡。其中，牽引這一連串活動，締造龐大功績的正是楊南郡老師。楊老師大量的譯著與著作、詳盡的調查以及研究成果，提供我們認識日治時期學者及其調查研究之基本架構，楊老師之貢獻無庸置疑。

發表者曾針對日治初期的原住民族研究者森丑之助（1877-1926），以書誌學角度進行研究（宮岡真央子，1997a、1997b）。同時期，在台灣楊南郡老師已著手探討森丑之助，不久即出版翻譯選集（森丑之助，2000）。這本冠上森丑之助調查回憶錄（丙牛生，1924a）題名——《生蕃行腳》的書中，除了詳盡刊載森丑之助的年譜、著作目錄及調查路線圖之外，更有題為〈學術探險家森丑之助〉之評傳（楊南郡，2000）。此評傳乃目前為止關於森丑之助的著作中，質與量皆出色之大作，首度深入解析森丑之助的研究與生平。出版至今 10 年，該研究為每個欲認識森丑之助的人不可不看的著作。因此我們可以說，該評傳乃楊老師針對日治時期學者所做的無數研究中具里程碑性質的一項業績。

本報告首先將根據發表者從事森丑之助研究的經驗，探討該評傳在森丑之助研究史之定位並闡述其特色。緊接著，將論述楊南郡老師依據森丑之助的研究與生平而為其命名的「學術探險家」一詞其實亦可套用於楊老師身上。最後，將探討時空相隔一百年的兩位學術探險家之間的不同¹。

* 本文由簡月真（東京大學研究員・國立東華大學副教授）、巫文嘉（東吳大學日本語文學系研究助理）敬譯。

¹ 本稿為楊南郡老師〈學術探險家森丑之助〉的日語譯本（楊南郡，2005）中的解說文（宮岡真央子，2005）為底本修訂而成。

一、被遺忘的研究者——森丑之助

以往在研究者之間，對森丑之助的認知主要有三個層面。第一，鳥居龍藏的調查助理。第二，於考古學領域中因發掘多處遺跡而深受好評的發現者（金闕丈夫、国分直一，1979：6）。第三，於台灣原住民族研究領域，以早期的照片集《台灣蕃族圖譜（第1、2卷）》、泰雅族民族誌《台灣蕃族志（第1卷）》之作者而廣為人知（森丑之助，1915、1917）。

然而，雖然研究者們知其名，過去卻鮮少有人針對森丑之助及其研究進行探討。這也許是因為森丑之助無學歷且以總督府囑託等身分從事調查研究，且無後繼者或弟子之故。即使是森丑之助過世後2年，亦即昭和3（1928）年創校的台北帝國大學裡的原住民族研究大本營「土俗人種學研究室」的宮本延人與馬淵東一等人對森丑之助的相關知識，除了其著作之外皆為一般傳聞²（馬淵東一，1954b：91；宮本延人、瀨川孝吉、馬淵東一，1987：172）。總言之，流傳後世的森丑之助相關訊息，多屬斷簡殘編。

然而，實際上森丑之助乃明治末期至大正中期的原住民族知識權威。例如，大正元（1912）年發行的《日本大百科事典》（三省堂出版）中的〈台灣蕃族〉條目即由森丑之助執筆（森丑之助，1912）。台灣總督府自大正2（1913）年至第二次世界大戰結束為止的民族分類法（阿美、泰雅、賽夏、布農、鄒、排灣、雅美等七族）即參考森丑之助的分類（馬淵東一，1954a：3-4；宮岡真央子，1997b：126）。森丑之助拍攝的許多照片長久以來廣為使用、其於台灣總督府博物館蒐集的龐大標本資料亦由國立台灣博物館承接³。然而，森丑之助本人卻鮮為人知。如楊老師所感嘆，森丑之助是個被遺忘的研究者（楊南郡，2000：30、110）。

日本自1980年代後期便一方面呼應台灣方面的日治時期資料挖掘活動，一方面開始整理、重新評價過去的台灣原住民族研究者之業績。較鳥居龍藏及伊能嘉矩相關資料的整理、重新評價晚約10年，1990年代後期日本終於開始著手整理森丑之助的相關資料（宮岡真央子，1997a、1997b；笠原政治，2002；森丑之助，

² 擔任該研究室主任教授的移川子之藏與森丑之助認識（台灣總督府博物館，1939：389-90）。關於森丑之助的交友關係請參照（笠原政治，2005a）。

³ 國立台灣博物館於2008年舉行的特別展「百年物語——台灣博物館世紀展藏特展」中，提到森丑之助乃對國立台灣博物館有重大貢獻的人物之一，並介紹森丑之助所蒐集的標本資料（李子寧，2009：48-53）。

2002 等)，其與開頭所述楊南郡老師撰寫的森丑之助著作選集出版時間相差不多。2003 年和歌山縣新宮市的佐藤春夫記念館舉辦展覽會，聚焦於留下許多以台灣為舞台作品的作家佐藤春夫和森丑之助間的友誼關係，公開展示森丑之助寄給佐藤春夫的書信（新宮市立佐藤春夫記念館，2003）。經過這一連串的活動，森丑之助這位研究者的具體形象逐漸明朗。不過，這些主要為書誌學觀點的研究，對森丑之助這位人物的全面性理解，則在楊老師的研究之後才開始⁴。

二、楊南郡老師的森丑之助研究之特色

楊南郡老師之所以能解析森丑之助的研究與生涯全貌，乃因楊老師「發現」了長久以來鮮為人知的森丑之助著作以及他者對森丑之助的描述。此可謂楊老師的森丑之助研究之一大特色。

廣為人知的森丑之助著作，除了前述的《台灣蕃族志》（1917）與《台灣蕃族圖譜》（1915）等單行本之外，尚有刊載於《人類學雜誌》及其前身的《東京人類學會雜誌》、《台灣時報》、《東洋時報》等論文與彙報類文章。其主要為文體簡潔的調查報告（宮岡真央子，1997a：192-3），因此難自其中尋獲森丑之助個人的生活與思想等訊息。此外，當時其他人對森丑之助的描述亦有限，因此欲探究其人物形象相當不易。不過，慶幸的是大正 2 年森丑之助離台前夕的演講紀錄〈關於台灣蕃族〉（森丑之助，1913）不僅詳細敘述森丑之助對原住民族的看法亦談及其自身成長過程，楊老師於著作中亦引用這篇演講內容論述森丑之助的思想與人生。但楊老師並不滿足於此，除了這篇紀錄之外，還詳盡調查當時的報章雜誌，重新「發現」有關森丑之助為人的文章並細讀內容，終能成功地勾勒出森丑之助的思想與人生態度。

例如，楊南郡老師所挖掘的著作之一乃連載於《台灣日日新報》19 回的〈南中央山脈探險〉，其於森丑之助眾多的調查報告中可謂描寫得最生動的讀物（森丙牛，1909）。該文每回皆佔報紙一整個版面，宛如人氣連載小說。也許在當時的台灣，森丑之助於山地的所見所聞與台灣平地的生活是迥然不同的世界，因而吸引一般讀者莫大的興趣與關心。而且內容詳細地描寫森丑之助與原住民族間的關係，

⁴ 2005 年楊老師的〈學術探險家森丑之助〉在日本翻譯出版時，笠原政治曾討論佐藤春夫等與森丑之助的交流（笠原政治，2005a、2005b）。同年，從事許多關於台灣原住民族報導文學的柳本通彥（2005）亦出版《明治冒險科學者》論述森丑之助與伊能嘉矩、田代安定。

例如森丑之助回憶其於大崙坑社被布農族的阿里曼·西肯追殺逃過一劫，數年後兩人成爲莫逆之交等紀錄，成爲後世認識森丑之助的爲人及其與原住民族交情的重要資料。

此外，楊老師亦探討刊載於《實業台灣》中未受重視的森丑之助晚年之論述（丙牛生，1924b；森丙牛，1924、1925a、1925b）。這些是森丑之助針對官界、學界以及一般台灣社會表明自己對原住民族社會與研究立場、意見之文章，透過文中所述思想，使我們對森丑之助的認識變得具體鮮明。

楊老師不僅針對森丑之助的著作進行研究，更進一步地參考森丑之助歿後由宮川次郎撰寫的文章以及《台灣日日新報》上刊載的含森丑之助好友尾崎秀眞發言的森丑之助訃聞相關報導，成功地發掘、解析森丑之助晚年的思想與活動（宮川次郎，1926；筆者不詳，1926）。宮川次郎與尾崎秀眞皆提到，對布農族抗日戰爭感到心痛的森丑之助將大阪每日新聞提供的著作出版獎助金運用於「蕃人樂園計畫」盼能協助布農族移居並安定生活，由此可窺見森丑之助原計畫出版的《台灣蕃族志》（1917）與《台灣蕃族圖譜》（1915）續刊未能實現的原因之一，同時其亦爲重要證言使後世得以認識森丑之助這位人物的人生態度。換言之，由於楊老師鉅細靡遺的調查與研究，終能具體勾勒出森丑之助的一生。

楊老師對森丑之助研究的第二點特色在於，關於森丑之助以中央山脈爲舞台的研究調查之解析，皆出自於楊老師身爲資深登山家的豐富經驗與確切的觀點。森丑之助本身的文章中少有調查行程的詳細記載，即使有記載也僅片斷式地記錄地名，且其多爲現今已不再使用的日文地名或已遷移、荒廢的村名。如今，欲尋得此地名的所在地是極困難的事，但楊老師將地名和森丑之助片斷式描述的地形、周圍環境對照後尋獲其現今所在地，並標記於地圖上，這是項相當耗時的工程，但楊老師的堅持使其成功地解析出森丑之助走過的路線及其調查經歷。若無踏遍台灣各山脈的經驗以及對地形、環境的理解，絕對無法有此研究成果。即使同時代的人都難以理解的森丑之助之調查足跡，於一百年後，由楊南郡老師精采地重構。

楊老師對森丑之助研究的第三點特色則是，長久以來對於森丑之助功績的探討僅限於原住民族與考古學研究領域，但楊老師則指出森丑之助於植物學、地理學上的貢獻。例如，植物學研究方面，森丑之助發現許多新物種，從學名或中文名稱中含森丑之助名字的高山植物至少有 20 種以上便可窺見一斑。楊老師參考植

物學家佐佐目舜一對森丑之助的評價以及森丑之助本身撰寫其與川上瀧也的交情等資料，探究森丑之助鮮為人知的植物學研究貢獻（楊南郡，2000：57-62）。此外，在地理學方面，以連載〈南中央山脈探險〉中爲了證明玉山山脈有別於中央山脈而進行的調查爲例，楊老師強調森丑之助在台灣地理學上所扮演的角色（楊南郡，2000：53-57）。

另外，根據〈學術探險家森丑之助〉的表現手法來論述楊老師研究上的特色，我們可以說楊老師的著作具備高水準的文學價值。眾所周知，楊老師的著作以「報導文學」廣受好評，尤其〈學術探險家森丑之助〉的描寫生動且富戲劇性，宛如是篇以森丑之助爲主角的小說。一方面踏實地求證，另一方面運用文學修辭手法生動地描述，這可說是楊老師的特有風格！

三、時代相隔的兩位學術探險家——森丑之助與楊南郡老師

目前爲止，楊老師探討的多是投入研究世界的人。然而，當他追尋這些人的足跡時，其所重視的與其說是這些人發表的學術研究成果，不如說是他們的調查行程以及激發其調查原動力的心志、熱情與爲人等層面。因此，楊老師雖然根據詳細資料論述學術研究者，但筆法上並未充斥學術用語或理論，其所重視的是對「人物」的魅力與真實存在的描寫。例如〈學術探險家森丑之助〉中，楊老師對森丑之助未學習正規學問而急於展開調查一事，敘述如下：

因為沒有學術基礎，他所有的原始性資料與原創性的論點，都是在歷經千辛萬苦的實地踏查後，以非學術語言樸實無華地紀錄下來，是針對親眼目睹的現況做最平實的記載，而非以主觀理論來詮釋事實。這樣原汁原味的記錄，比起通篇演繹的學術論文更具價值，因為學術論文常常受到新出土證據的挑戰，某些當時被視為至高無上的經典，幾年後可能淪為不值一顧的笑話。然而，實地採訪的部落生活文化或地理原貌的記錄，幾年後當調查訪問對象因為時勢的變遷而消失或變異時，原始的記錄就更加珍貴了（楊南郡，2000：39）。

楊南郡老師在此談的是森丑之助，但我認爲其實其亦深深地反映楊老師本身的立場與態度。

例如，楊老師譯著中經常加註原書沒有的調查行程地圖和大量的注解。這些

皆為楊老師一步步踏實的實證研究所得的豐碩成果，形式上其雖以譯著的附屬資料方式呈現，但實際上皆為楊老師獨自的研究成果。承蒙楊老師踏實的實證主義之實踐，讀者方有機會深度認識一百年前學者們的樣貌。這是楊老師獨有的手法，是其他人無法模仿的功力。

楊老師不隸屬於任何研究機構，自由地建構其個人獨特的翻譯、研究風格，也許楊老師將其自身和森丑之助的人生態度重疊，而深感共鳴吧！楊老師獨自一人投入知識的世界，適度地與學術界保持距離而以其自身立場發言、從事研究，其態度與森丑之助幾乎無異。楊南郡老師用自己的雙腳踏遍田野，然後從中思索。其貫徹始終的態度，令人不由地讚嘆其與森丑之助可同喻為「學術探險家」！現代的學術探險家楊南郡老師，透過其自身的研究與探險邂逅了森丑之助。楊南郡老師寄情相隔一百年的前輩的人生和心情，並與之共鳴，且將那份感動呈現在你我眼前。

不過，雖然森丑之助和楊南郡老師皆可喻為「學術探險家」，但兩人之間有決定性的差異。森丑之助在各種外界的期許、壓力和其自我問題意識、志向的夾縫中掙扎，最後因理想無法實現，悲嘆度日，遂於 40 多歲結束生命。楊南郡老師曾指出，森丑之助操之過急（楊南郡，2000：112）。相對地，楊南郡老師專注執著地開拓一條他人無法追隨的道路，並締造了前所未有的無數功績，高齡八十歲依然活躍於研究領域。我們可以說，楊南郡老師雖對一百年前森丑之助的挫折、失望深表同感，但不同的是，楊老師開闢了遠離其境的一片新天地。

貳、結語

以上，簡短地探討了楊南郡老師的森丑之助研究之特色與意義。楊老師謙虛地傾聽過去的研究者們的聲音、徹底地進行實證之研究風格，長久以來一直是我學習的榜樣。我深刻地體會到：雖然無法像森丑之助與楊南郡老師般縱橫探險中央山脈，但我們必須學習兩位「學術探險家」的人生態度——忠實自己對學問的興趣及使命感、將自身的研究成果公諸於世並堅守自己扮演的角色！

參考文獻

- 丙牛生。1924a。〈生蕃行脚(1-5)〉《台灣時報》55期，頁106-14；56期，頁141-9；57期，頁158-66；59期，頁107-13；62期，頁144-55。
- 丙牛生。1924b。〈浪人氣質〉《實業の台灣》16卷，10期，頁62-65。
- 台灣總督府博物館。1939。《創立三十年記念論文集》。台北：台灣博物館協會。
- 李子寧。2009。《百年物語——台灣博物館世紀展藏專輯》。台北：國立台灣博物館。
- 柳本通彦。2005。《明治の冒険科学者たち——新天地・台灣にかけた夢》。東京：新潮社。
- 金関丈夫、国分直一。1979。《台灣考古誌》。東京：法政大學出版會。
- 宮川次郎。1926。〈蕃通森丙午の死因〉《台灣・南支・南洋パンフレット》21期。東京：拓殖通信社。
- 宮本延人、瀨川孝吉、馬淵東一。1987。《台灣的民族と文化》。東京：六興出版。
- 宮岡真央子。1997a。〈森丑之助の著作目録及び若干の解説〉《台灣原住民族研究》2期，頁189-99。東京：風響社。
- 宮岡真央子。1997b。〈野人の文化人類学——森丑之助の生涯と研究〉《南方文化》24期，123-37。天理：天理南方文化研究会。
- 宮岡真央子。2005。〈解説〉收於笠原政治、宮岡真央子、宮崎聖子（編訳）《幻の人類学者森丑之助——台灣原住民の研究に捧げた生涯》頁109-22。東京：風響社。
- 馬淵東一。1954a。〈高砂族の分類——学史的回顧〉《民族学研究》18卷，1-2期，頁1-11。
- 馬淵東一。1954b。〈高砂族に関する社会人類学〉《民族学研究》18卷，1-2期，頁86-104。
- 馬淵東一。1974a。《馬淵東一著作集（第2卷）》頁249-73。東京：社会思想社。
- 馬淵東一。1974b。《馬淵東一著作集（第1卷）》頁443-83。東京：社会思想社。
- 笠原政治。2002。《文化人類学の先駆者・森丑之助の研究》科学研究費研究成果報告書。
- 笠原政治。2005a。〈師・友人・訪問者たち〉收於笠原政治、宮岡真央子、宮崎聖子（編訳）《幻の人類学者森丑之助——台灣原住民の研究に捧げた生涯》頁231-48。東京：風響社。

- 笠原政治。2005b。〈森丑之助と佐藤春夫〉收於笠原政治、宮岡真央子、宮崎聖子（編訳）《幻の人類学者森丑之助——台湾原住民の研究に捧げた生涯》頁 249-274。東京：風響社。
- 森丑之助。1912。〈台湾蕃族〉《日本百科大事典》6 卷，頁 734-7。東京：三省堂。
- 森丑之助。1913。〈台湾蕃族に就て（上、下）〉《台湾時報》47 期，頁 6-13；49 期，頁 15-27。
- 森丑之助。1915。《台湾蕃族図譜（第 1 卷、第 2 卷）》。台北：臨時台湾旧慣調査会。
- 森丑之助。1917。《台湾蕃族志（第 1 卷）》。台北：臨時台湾旧慣調査会。
- 森丑之助（楊南郡訳）。2000。《生蕃行脚——森丑之助的台湾探險》。台北：遠流出版。
- 森丑之助。2002。〈台湾蕃族の種別について〉《台湾原住民族研究》6 期，頁 330-43。
- 森丙牛。1909。〈南中央山脈探險（1-19）〉《台湾日日新報》1 月 7 日-2 月 4 日。
- 森丙牛。1924。〈台湾の生蕃問題〉《実業の台湾》16 卷，12 期，頁 13-16。
- 森丙牛。1925a。〈台日社説の蕃人に関する社説を読みて——敢て世人の謬相を解く〉《実業の台湾》14 卷，7 期，頁 22-30。
- 森丙牛。1925b。〈蕃地開発の先決問題として——蕃務法規制定の必要〉《実業の台湾》17 卷，8 期，6-15。
- 筆者不詳。1926。〈蕃通の第一人者森丙牛氏の死〉《台湾日日新報》7 月 31 日。
- 楊南郡。2000。〈學術探險家森丑之助〉收於楊南郡（編）《生蕃行脚——森丑之助的台湾探險》頁 29-113。台北：遠流出版。
- 楊南郡。2005。〈學術探險家森丑之助〉收於笠原政治、宮岡真央子、宮崎聖子（編訳）《幻の人類学者森丑之助——台湾原住民の研究に捧げた生涯》頁 15-107。東京：風響社。
- 新宮市立佐藤春夫記念館。2003。《佐藤春夫宛 森丑之助書簡》。新宮：新宮市立佐藤春夫記念館。

簡月真（東京大學研究員・國立東華大學副教授）

巫文嘉（東吳大學日本語文學系研究助理）

敬譯